

## 序章 プロローグ

しばらく言葉責めされたあと、ベッドで四つん這いにさせられて、

「じゃあパンパンしていくから……イキたくなったら俺のことは気にせず好きなタイミングでイッてね？」

という声がするといきなり後ろからガシッと太ももを掴まれ、さらにお尻が上を向いてしまうほど持ち上げられてからズドンっと勢い良く叩きつけてきたのだ……

「ちょ！　ハヤト！　こんなに激しくされたらすぐイッちゃう！  
「いいよ、イッて。でも俺はまだだからもう少し付き合ってね？」



……セックスはよりいつそう激しくなる一方で私はもう何も考えられなくなるほど感じてしまっていた。そしてついにその時が来たようだ……

どびゅーっ！！びゅー！！ふしやあああっ！！！！という音と共に大量の精子が流れ込んでくるのを感じた瞬間、私の心の中は精液でどろどろになっていた。

膣の中と心の中が同時に温かいもので満たされたのだった……………

みなさんは、どう思うだろうか？ いきなり濃厚なセックスから始まり、得も言われぬほどの快感と脳症が焼けるほどの熱を浴びて……

そして、体中をまさぐられ、欲望の限りを尽くされ……

体中の神経という神経が焦がれて、絡み合い、ほどけあい、細胞が一秒ごとに、生まれ変わり、そこから新たな自分になっていく……

オーガズムの最中は、心も体も浄化されて、セックスの余韻には穏やかでゆったりとしたただひたすらに静謐な幸せだけが横たわる。

そんなストーリーを……。

これは、私が今まさに楽しんでいるセックスライフ。

まさか、私にこんな幸せと喜びに満ち溢れた日が訪れるなんて思ってもいなかった……………

三ヶ月前の私は……あれだけ辛い日々に、苦しんでいたのに……

第一章 推しのアイドルとのセックスーアイドルは私の体に夢中！ー

興奮が肌を焼く中、光に濡れる彼は、女性のような色香をまとっている。  
私達はベッドの上で、お互いの存在だけを感知しているのだ。



私は今か、今か……とその時を待ちわびている。

膣は奥から、びくびくつと震えながら痙攣を起こす。

肌は泡立ち、脳の中ではバソプレシンとエンドルフィンがだばだばとこぼれ落ちる。

「じゃあ……ゆうか……今日もお疲れ様……」

そして……いつもの行為が始まった。

彼は私をベッドに横たえると、いきなり股を広げてきた。

乱暴だが……これがもうたまらなくなってしまった。調教されきって、性癖と性欲がもう留まるところを知らない。

これほどセックスに喜びを感じたのは、いつ以来だろうか？ すっかり忘れていた幸福と生きる喜びを全身で味わえる。

そう考えただけで、身悶えするほど嬉しいのだ。

「ん……キョウヤ……ま○こ……いつもみたいに……して」

「ん？ どうしてほしいの？ はっきり言ってくれないとわからないよ？」

嘘だ。私がどうしてほしいのか、彼は熟知している。

わざと焦らして、膣分泌液を増やそうとしてくれるのだ。

「いじわる……わたしのおま○こ広げて……いっぱいキスして？」

「よく言えました。じゃあ、君が大好きなキスしながら……いっぱい愛してあげる」

彼は私の膣をくばぁと広げる。そして、そのままキスをする、彼は私の膣に食うよう吸い付いてきた。

「んちゅ……れろお……はむ……んく……ふはぁ……」

舌を入れられて膣内を舐めまわされると、脳が溶けそうになるほど気持ちいい。

もうすでにびちやびちやに濡れているおま○こをさらに濡らすように愛液と唾液が垂れるのを感じる。もう準備万端なのだ。

「ゆうかのま○こ……美味しいよ。どう？ 舐められるの大好きだよね？ 気持ちいい？」

「わかっていくせに……」

「感想……聞かせてよ？」

私は足元をもぞもぞさせながら、

「お腹の中がぞくぞくうくってなってる……アタマが真っ白になって……それで、もうどうにでもして……！ おま○こぐちやぐちやにして、どろどろにして！ そして、私のこと……特別だって思わせてっ  
てなる！」

「了解……お姫様……」

彼は、顔をわたしの股ぐらに突っ込むと、犬のように激しくペロで膣をクンニしてきた。

瞬間、体中に電流がほとほしり、脳が震えるほどの超快楽が注ぎ込まれたのだ。

「あん！ あああっ！ ああああっ！」

もう、私は意識の深海へ真つ逆さまにたたきつけられるだけだ。全身が解けるような快感がいつぱんに叩きつけられるもんだから理性さえどこへ行ったのかは定かではない。

でも、その感覚だけは確かにある。

「あああ……ん……んちゅ……くちや……」

彼は私の愛液を音を立てて啜り上げる。

そしてそのまま、舌を膣の中にねじ込み、ピストン運動のように出し入れをする。

ぐちゅ！　ぬちゅ！　　と膣が喜びに悶えるいやらしい音が響く。

「きっ！　きもちいい！　きもちいいの！」

膣は激しく脈動しながら彼のペロを吸い込もうとする。もちろん、死ぬほど気持ちがいい。私はただひたすらに彼の舌を締め付ける。

「ん……ちゅるるっ」

「あっ！　あああっ！　ああ……」

もう私はこの快楽を食いつけるだけだ。理性はとうに崩壊してしまっている。ただ本能のままに彼を求め、愛しているだけなのだから……。

彼はそのまま私のクリトリスの皮を剥き始める。もうそこはピンピンに膨れ上がっていて、触られるのを今か今かと待ちわびている状態なのだった。

そして……彼はその期待に応えるように舌を使って舐め上げたのだ。

その瞬間びくうううううううと体が跳ねた。

「あああああつっ！　そこ！　そこ気持ちいい！！！！　なんでもする！　なんでもするから今のもっとやって！！」

「（ん）……？」

「ああつっ！　そこ！　そこそこおおお！！」

彼は的確に、クリトリスの急所をついてくる。「あああつっ！！　だめ！　もうだめえ！」

「まだ、始まったばかりだよ？」

彼は私のクリトリスを執拗に攻め立てる。その快感はもう凄まじく、脳が内側からひっくり返るほど気持ちがいいのだ……。そして、それと同時に膣内に指を挿れ始めたのだ。膣壁と子宮口を同時に責められる感覚に私はもう何も考えられなくなってしまふほどに感じてしまったのだった。しかし、それでもなお彼は容赦なく責め続けるのだからたまったものではない……。

そしてついにその時がやってきたのである。それは今まで感じたことのないほどの強烈な感覚で私の体を駆け巡った。

「あっ!! あんっ!!」

もう何が何だか分からない……ただ、気持ちいいということしか分からないのだ。

「ああ……ん……んん! くちや……」

そして、そのまま彼は私の膣とクリトリスを激しく同時刺激してくれた。

体はびくびくびくつと震えて、炎で凍えるほどの快楽を膣から脳天に打ち上げた。

「イク………!!」

オーガズムしたのだ。脳内に快楽物質がびゅびゅびゅつと溢れて、あふれて、白に染めあげる。

「………ふう………気持ちよかった……」

彼は、私の横に横たわると、

「この前のライブ来てくれてありがとう……ゆうかからは、いつも元気もらっているよ?」

クンニが終わっても彼は私のことを労わってくれた。その優しさに私は胸がキュンとなると同時に愛されていることを実感させてくれる。

アイドルの彼は、女性の扱いに長けている。私の「彼氏達」の中でダントツ。

言ってほしいときに、言ってほしい言葉をかけてくれて、

欲しいときに欲しいものをくれる。

なにより、私を必要としてくれるのだ。

「えへへ……推しのアイドルにそんなこと言われると、嬉しいな……！ でも、本当にわたしでいいの？ キョウヤだったらもっと女優の人とかとも付き合えるでしょ？」

「ん？ まあね……でも、この業界の人達はみんな打算的で……もう疲れちゃったんだよ……」

「だから私みたいな普通の子と付き合ってくれるの？」

「そんなことないよ。俺はゆうかが好きだから、こうしているんだ……それにゆうかは特別だよ……」

…

そういうと、彼は私の裸をぎゅっと抱っこしてくれた。頭をよしよしと撫でながら、むぎゅむぎゅうううとハグしてくれる。

私の体はオーガズムした直後だというのに、もうオキシトシンホルモンが分泌され始める。

愛されホルモンが滝のように、生産され脳内を埋め尽くす。

全身が性感帯となり、快楽で恍惚を浴びる。私は、彼の胸に顔をうずめる。すると、彼はさらに優しく抱きしめてくれたのだ。

「キョウヤ……好き……」

「俺もだよ」と彼は言ってキスをしてくれた。そしてそのまま舌を入れてきたのである。私もそれに応えるように舌を動かすのだった。お互いの唾液を交換するような濃厚なキスは灰白質が溶けてしまうほど気持ちがいいものだった。

「じゃあ……ゆうかのま〇こ広げて……いっぱい突いていくね？」

「うん……キョウヤの好きにして……」

彼は私の膣を優しく両手で開くとゆっくりと膣内に亀頭の先をしゃぶらせてきた。その最中もクリトリスの穴や尿道口などを愛撫してくれるので、私はそのたびにビクビクと震えてしまう。

「大丈夫？痛くない？」

「ん……平気」

そして、そのまま彼は私の膣の中にずぶぶつと入ってきたのである。その瞬間、まるで轟轟と燃える電流が走ったかのような快感に襲われた！

「あっ！」

思わず声が出てはしたなくメスのフェロモンをこぼす。わたしはいつも彼の前では自然体でいられるのだ。

「動くよ」

「うん……」

彼は私の腰をぐつと掴むと、そのままゆっくりとピストン運動を始めた。膣壁を擦るたびに私は甘い吐息を漏らしてしまう。そして、同時に子宮口をノックされるような衝撃にくらくらしてしまう。

彼のものは長く太く大きいので、奥まで突かれるたびに意識を失いそうになるのだ……でも、それがたまらなく気持ちいいのである！ そんなことを考えているうちにも彼はさらに激しく責め立ててくるのだ。もうすでに何度も絶頂を迎えているというのにまだ満足していないようだ……しかしそれは私も同じだ。もっともっと彼を味わいたい。もっともっと愛してほしい。すると彼は、

「もっと愛してほしいって顔してる……」

私の表情を察してそういつてくれた。

「ふふ……正解……」

彼はそのまま。ピンスで子宮口をコンコンとリズムよく叩いてくる。そのたびに私は、

「あっ！ あああっ！！」と甘い声を上げてしまう。

そして、そのままさらに激しく腰を動かすのだ。

パンッ！ パチュっという音が部屋に響きわたった。

もうすでに私の膣は愛液でぐちよぐちよだ……しかし、彼はそれでもまだ満足できないらしい……

「もつと気持ちよくしてあげるよ」と言うなり、私のクリトリスをつまんでくれた。クリトリスと子宮口の同時攻めをしてくれるようだ。しかも、その状態で耳元で甘い言葉を囁いてくるものだからたまらない。

私はもう完全に快楽の虜になってしまった……。

そして彼は私の子宮口のスイートスポットを亀頭でぐりぐりつと刺激しながら、さらに激しく腰を動かしていくのだ。

「あああ……ん……んん！キス……キスもしてえ」と私が言うと彼はそのままディープキスをしてきたのである。舌を入れてきて唾液を交換するような濃厚なキスだ。私は幸せすぎて死にそうになってしまったほどだった……しかし、彼はさらに動きを加速させるようにしてきたのである！

「ゆうか！ ゆうかのま○こ！ おれのちんこ吸い込んで大好きだつて言ってくれる！ 好きだ！ 大好きだ！ もうこの体なしじゃ生きていけない！！！！！」

「わたしも……あいしてる、愛してるっ……！ ああっ！ いいとこに……当たってるうう！！！」

もう、私はおかしくなりそうである。彼のことと頭がいっぱいなのだ。もはや彼を好きすぎてそれ以外考えられないのである！そして、そのまま彼はラストスパートをかけ始めたのだ。私の膣はそれに呼応するように痙攣し始めてしまうのだった。

膣が奥からぶるるつと震えて、ペニスを吸い込むように蠕動運動をする。すると膣内に備わったひだが肉棒を捉え、こりこりこり！ むぎゅううううつと絡みついた。今まで以上の吸い付きと動きできつく締め付けたのでキョウヤもこれにはたまらず悲鳴をあげて身をよじるのだった。しかし私の腰を掴む手には力を込めたまま離さないため結局感じる部分の最奥まで突き入れられてしまうことになるのである！そしてついにその時が来た……

「うつつつつ！ ゆうか！ 出る！」

彼は私の中に大量の精液を流し込んできたのだ……！ どびゅっ！ーぶしやあああっ！ーどくんっどくんっ……びゅくくく……！

「あああっ！出てるううう！」私は絶叫しながら絶頂を迎えたのだった。膣壁が激しく収縮しペニスから全てを絞り取ろうとするような動きをする。

その刺激でキョウヤも再び達してしまったようだ……びゅっ！どぶぶっ！……どくんどくん……

…

「あああああっ！！」私はあまりの快感に頭が空っぽになった。もう何も考えられないほど気持ちいいのだ……！そのまましばらく余韻に浸っていたのだがやがて彼は私の膣からゆっくりとペニスを引き抜いたのである。するとそこからどろりとした白濁液が流れ出てきたのだった。

最高のセックスだった。

しかし、それでもなお彼のものは萎える気配がないどころかより大きく太く長くなっていた。るせんチはあるだろうか？ 前々からでかいなとは思っていたが、今日は見惚れるほどの反り返りっぷりだ。光を反射するほどの黒光り。

鼻の奥をくすぐる性フェロモン。

男性ホルモンを蓄えた最高の宝剣だ。

「ゆうか……舐めて？」

「うん……いいよ」と私は彼のものを口に含んだ。

そしてそのまま、ゆっくりと頭を前後に動かし始める。

舌を使って裏筋を刺激したり亀頭をチロチロしたりしながら、時折喉の奥まで使ってディープスローとするのである。

「んちゅ……れろお……」

彼は私の頭を掴んで固定すると腰を振り始めたのだ！まるで道具のように扱われることに興奮を覚えながら、私は一生懸命に奉仕を続ける。

フェラすると彼はいつも悶えてくれる。それがたまらなく嬉しい。  
必要とされて、彼の心のなかにまで入り込める。

わたしのものよってマーケティングできる気がして……

私はベロでつつーっと巨根をなぞると、裏スジを擦ってあげる。

「あああ……！ ゆうか……！」

私はさらに強く吸い付いてあげる。

じゅるっ、ずぞっという音が部屋に響き渡り、その音に興奮してしまふ。

「キョウヤ……気持ちいい？」

「ああ……すごく、上手だよ」と彼は褒めてくれた。私は嬉しくなりさらに激しく頭を動かす！じゅぽお！ぐぽつ、ぬちゃあ……という音が響き渡る。

彼のものは大きいから顎が外れそうになるけどそれでも頑張る。だって彼が喜んでくれるならそれだけで幸せだから。そしてついにその時が来たようだ。キョウヤは私の頭を掴むと思いつき引き寄せた――！

そのまま腰をくねくね動かしながら、

「好き！ ゆうか！ 好き！ あつ！ ゆうか！」

と私の名前を連呼してくれる。子宮がきゅんとなる……。彼が私の体を求めてくれてるのを感じる  
と、お腹の中が熱くなる。

そしてそのまま彼は私の中に出したのだった。どくんーどびゅっ！ーどくんどくん……！！びゅ  
ー！！！！

「あああつ！！」彼は雄叫びを上げながら、わたしに口内射精してくれた。

彼はアイドル。みんなの憧れの存在。

数多の女が焦がれ、恋するが手の届かない男……そんな彼を私は独り占めできるのだ。

心のなかに灰色の背徳感がくすぶる。

征服欲と独占欲がぱちつと満足げな音をあげた。

彼の精液の味は、私の心を驚揺み離さない。

彼が飲めと言ってくれば喜んで飲むし、

しゃぶれと言ってくれるのなら、満足させてあげたい。

だってそれが私の幸福なのだから。

どくどくん！　びゅっ！　びゅっ！　若い彼の精液量は凄まじい。

熱くて、濃くて、ああ……私今セックスしているんだな……愛されているんだな……と訴えかけてくれるのだ。体の奥まで彼のものが届く。

「ん……んぐっ」

喉を鳴らして、飲み干していくと、彼は頭を撫でてくれるのだ。それがとても嬉しいし、幸せを感じる瞬間でもある。

そして私はゆっくりと口を離すとそのまま彼の胸に倒れ込んでしまうのだった……。しかしまだ終わりじゃないようだ……。今度は彼が私の体を持ち上げてくる……。ああまた始まるんだ……。そう思うと期待で胸が高鳴るのを感じた。

「ゆうかは可愛いな……」そう言ってくる彼に対して私は素直に受け入れることにしたのである……。

.....

一体どれくらいの間、抱かれていただろうか？ 体位を変え、まさぐられ、やりたい放題、され放題の犯され放題だ。

だが、それが私のしてほしいことだったのだ……………

彼は私をベッドで四つん這いにさせると、ペニスを膣口にぐちゅぐちゅと擦り付けてくれる。

「あん……キョウヤ……おちんちん大きい……！」

「入れるよ？ ゆうかのおま○こに」と言いながらゆつくりと、突き刺していったのだ……ぐにゅうううと亀頭が一番大きい部分まで潜り込む感覚だけで頭がパチンと弾けそうになるような快感が襲ってくる！そのままキョウヤはズン！っと一気に根本までペニスをねじ込んできたのだ……！ 膣壁を押し広げて進んでいく巨根を感じた瞬間、あまりの圧迫感に息をするのも忘れてしまつて……。だけどまだ全部入りきらない。極太で長い彼のモノは全て受け入れようとする子宮口の芯にまで達してしまうほどなのだ……

「あさ……ふし……」



私は思わず感嘆の声を上げてしまう。するとキョウヤは私の腰を掴みながらゆっくりとピストンを開始したのだ。最初はゆっくりだったその動きは次第に激しくなっていくーぱんっぱんっという肌同士がぶつかり合う音とじゅぷっぐちゃっと粘液質な音が部屋中に響き渡っていた……

「キョウヤ……わたしのま○こどう？ 感想聞かせて！」

返事は聞かなくてもわかっているものの、つい聞いてしまうのである……

「奥まで閉まっていて……うねっていて……ペニスに大好きって吸い付いてきているみたい……」

「ん……それで？」

「それで……挿れると暖かくて、腰動かすのが止まらなくなつて……」

「うん。それから？」

「それから、コリコリしてて、世界で一番………大好きな一番気持ちいいま○こだ！」

彼はそんな嬉しいことを言いながら、パンパンとスパンキングを続けてくれる。「あぁん………嬉しい

い。もっと言つて

「ゆうかのおま○こ、最高だよ！ 俺のちんこを全部包み込んでくれるし、ヒクついていて可愛い！」

彼はさらに激しく腰を動かしてきた。パンツ！パンツ！という音が鼓膜を幾度も叩く……子宮口をゴツゴツと突かれて、全身に甘ったるい快感がびりびり焼き付いてくる。膣全体がきゅっと引き締まって、彼のものを強く締め付けてしまう。そうすればするほどもっと敏感になってしまうからもうどうしようもなくて……！ああ……気持ちいいよお……♡

「あん♡はあん♡」

声が止まらなくて……気持ちいい……好きっ！！そんな私の反応を見て気を良くしてくれたのだろう。彼の方からも腰の動きに合わせてように乳首を摘んだりクリトリスを撫でたりしてきたりしてくれる……。優しい愛撫は私の幸福感を満たしながら陰核にまで及ぶと、きゅむっとつまんでくれる。その快感たるや筆舌に尽くし難いものがあつたのである！「あああっ！」思わず大きな声が出てしまう。

そのまま彼は鼻先を私の髪にツツコミ、いい匂いだとつぶやきながら、膣内のスポットを責め立てるように腰を動かしてきた……子宮口を何度もノックされながら同時にクリトリスを刺激されるともうダメだった……。

「あああんっ！キョウヤのおちんちん気持ちいいっ！好きっ！もっとしてえっ！！」

もう完全に快樂墮ちした私は彼の動きに合わせるように自らも腰を動かしていたのである……そしてついにその瞬間がやってきたのだ……！どびゅーっ！どくんどくん……！ぶしゃあっ！どびゅるるー！！どぶどぶうううー！！熱い精液が再び注ぎ込まれたのである……。彼のものからは今までとは比べ物にならないほどの濃厚で大量の白濁液がとめどなく垂れ流されてしまっていた……「んあっ♡いっぱい出てるよお♡♡♡」と声を上げながらも私は絶頂を迎えてしまった……体がビクビク跳ね上がり、意識が一瞬飛ぶのだ……。

……しばらくして意識を取り戻した頃には、すでに空が白み始めていた。キョウヤは私を優しく抱きしめるように眠ってしまっていたけれど。その寝顔を見るだけで私も幸せな気持ちになれたのだから不思議なものだ。彼の寝顔を見つめているうちにだんだんと眠気に襲われてきてしまう……。

そして、翌朝。

ホテルを出ると、彼は名残惜しそうに

「次会えるのっていつだっけ？」

「うーんと、今日はハヤトで、明日がアキラだから明後日……！」

「待ちきれないよ……」

「順番だから……それまで一人でして……ね？」

「わかった……じゃあ明後日またたつぷりいちゃいちゃしょ？」

「うん……」

彼はそのまま私を車に乗せると、『次の男の家』に送る。

都内にある一等地のそのまた中でも最も高級な住宅地。

いわゆるタワーマンションというやつだ。

天に突き刺さるほどの摩天楼の密林。

その一番高く、神に唾するほどの塔の上……そこに彼がいる。

キョウヤは、マンションの下に車をつける。

すると、

「や！ ゆうかさん。今日もきれいだね」

そこには、このタワーマンションの管理人のハヤトがいた。

彼はH会社の社長。

そして同時にこのタワーマンションの所有者でもあるのだ。

正確な年収と資産は知らないが、利子だけで食べていけるほどお金持ちらしい……ちょっと悪いなと思ったが計算せずにはいられない私がいたのは内緒だ。

ちなみに、推定でも5億円以上はもっているよう……

私の人生が変わったのは、間違いない彼との出会いがきっかけだった。

まさかこの私がこんなシンデレラストーリーを味わえるなんて思ってもいなかった。

どこにでもいて、普通で、いやむしろどちらかというと不幸な部類だっただろう……

そんな私が、見初められ、超のつくほどのハイスペックイケメンたちに言い寄られ、取り合われるなんて……………

本編の第二章へ続く……………

